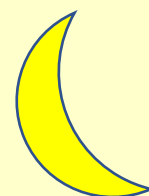


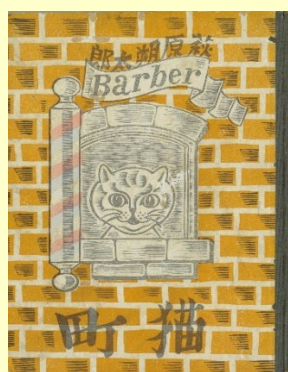
『猫町』 朔太郎と世田谷



1931年、萩原朔太郎は家族とともに世田谷区内の下北沢に移り住み、2年後には代田に家を新築し、ここが終の棲家となりました。この地で書かれた短編小説に『猫町』（版画荘 1935年）があります。本作では「猫の精霊ばかりの住んでる町」に迷い込む主人公の奇妙な体験が、繊細で鋭敏な文体で表現されています。

「見れば町の街路に充満して猫の大集団がうようよと歩いているのだ。猫、猫、猫、猫、猫、猫、猫。どこを見ても猫ばかりだ。」（『猫町』）

小説は、現実の旅に興味をなくした主人公が、近所の町で夢のような光景を垣間見る話で始まります。道に迷った彼は方向感覚を無くし、風景を錯覚して見知らぬ町に迷い込んだと思い込むのです。その後「一つの物が、視線の方角を換えることで、二つの別々の面を持つてること」が錯覚の原因だと気づくのですが、現実の風景を超えた〈別世界〉を幻想する主人公の姿は、朔太郎自身の詩作の歩みとも重なります。



『猫町』（1935年 版画荘 表紙画：川上澄生 装幀案：萩原朔太郎）